

絵本どうぶつえんへ
ようこそ！
大陸ごとにどうぶつに
会いに行きましょう

『コアラのクリスマス』

作/渡辺鉄太 絵/加藤チャコ
1,200円(福音館書店)

ここは南半球にあるどうぶつ村。みんなクリスマスの準備に大忙しです。そこへサンタさんから、雪風のせいで南半球まで来られないと手紙が届きました。さあ、サンタさんの代わりにするのは誰でしょう？



オーストラリアのどうぶつ

カンガルー



『カンガルーがいっぱい』

作/山西ゲンイチ
1,300円(教育画劇)

カンガルーのお母さんには45匹の子どもがいます。かわいい子どもたちは、好きなものも得意なこともそれぞれ違います。それをちゃんとわかってくれているお母さんカンガルーなのでした。



『カンガルーの子どもにもかあさんいるの？』

作/エリック・カール 訳/さのようこ
1,300円(偕成社)

「ええもちろん、カンガルーの子どもにもかあさんはいるわ」という言葉が、ほかの動物でも繰り返されます。キリン、ゾウ、イルカなど、それぞれの親子が登場します。



ホッキョクグマ



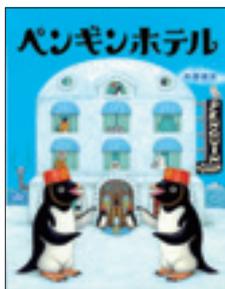
ペンギン



『365まいにちペンギン』

文/ジャン=リュック・フロマンタル
絵/ジョエル・ジョリヴェ 訳/石津ちひろ
1,600円(プロンズ新社)

1月1日の朝、宅配便が届きました。差出人のない箱を開けてみると1羽のペンギンが。次の日も次の日も、毎日ペンギンが1羽ずつ届き、大晦日には365羽になりました。これはいったい、誰のしわざ？



『ペンギンホテル』

作/牛窪良太
1,400円(アリス館)

広い海のどこか遠くにあるペンギンホテルは今日もお客さんにぎわっています。世界中を旅してきたライオンや泳ぎ疲れたクジラ、真夜中にはプレゼントを配り終わったあの人も。



『ホッキョクグマと南極のペンギン』

新刊

文/ジーン・ウィリス
絵/ジャーヴィス
訳/青山南 1,500円(BL出版)

ペンギンのブラウンさん一家はピクニックで道に迷い、北極にたどりつきました。そこにいたのは北極グマのホワイトさん。ホワイトさんはペンギンたちを引き連れて南極までの大冒険に出ました。

北極・南極のどうぶつ



『さむがりペンギン』

作/コンスタンツェ・フォン・キッツィング
訳/ひろまつゆきこ
1,200円(小学館)

すごく寒いのです。マフラーを編んでも、焚き火をしても、スケートで体を動かしても寒くてダメみたいです。じゃあ、あの子を「ぎゅつ」したらどうでしょう？

編集部おすすめ幼年童話

絵本のように読んであげてももちろんいいですが、子どもが自分ひとりで読む楽しみを実感できるような編集部おすすめの幼年童話をご紹介します。

スタートにぴったり ステップアップ

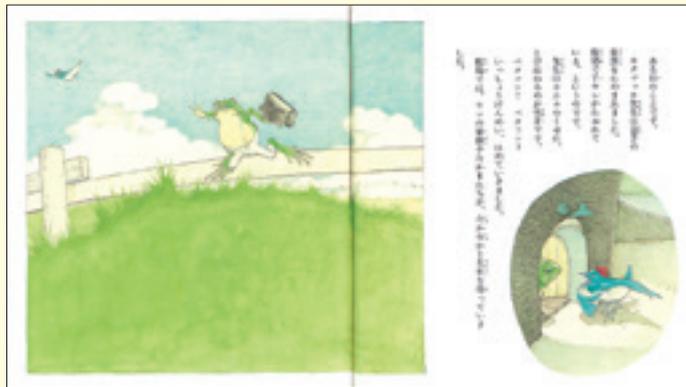


『キダマッチ先生！ 先生 かんじゃに のまれる』

文/今井恭子 絵/岡本 順
1,300円 (BL出版)

※第2作『先生 かんじゃを 食べちゃった!?!』もあり

カエルのキダマッチ先生は、どんな病気やケガでも治すという評判の名医です。足が折れたアリンコじいさんなど、次々に患者がやってきます。ある日、のどをつまらせた子ウシを診ていたら、ゴクツと飲みこまれてしまいました。



『しろいいぬ? くろいいぬ?』

文/マリオン・ベルデン・クック
訳/光吉夏弥 絵/池田龍雄
1,200円 (大日本図書)

のらの白い子イヌ、ワググルズはなんでもくわえるのが大好き。ある日、デパートで帽子をくわえて、イヌとりから追いかけられることになってしまいます。石炭で黒くなったり、ペンキでプチ模様になったりしながら、逃げ続けます。



『クシャラひめ』

作・絵/やなせたかし
1,000円 (フレーベル館)

クシャラひめは鼻がとても低いのを気にして、いつもひとりでした。あるとき、恐ろしい竜に出会いますが、悲しそうな眼をしていたので、思いきって話しかけます。よくある昔ばなしがひと味違う語り口調で書かれています。



『あひるの手紙』

作/朽木 祥
絵/ささめやゆき
1,200円 (佼成出版社)

1年生の教室に、「あひる」とたったひと言書いた手紙が届きました。ちょうどひらがなを書けるようになったみんなは、先生と相談して、ほんのひと言のお返事を書きました。すると、またお手紙が届きました。

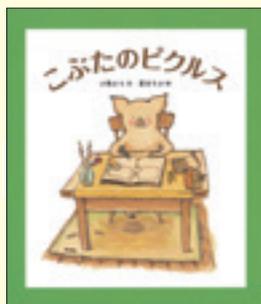


『だんまりうさぎとおほしさま』

作/安房直子 絵/ひがしちから
1,400円 (偕成社)

※第1作『だんまりうさぎとおしゃべりうさぎ』、第2作『だんまりうさぎときいろいかさ』もあり

ある晩、だんまりうさぎが土を耕し、ちいさな畑をつくりました。もぐらのおじさんやおしゃべりうさぎが何を植えているのか聞いても秘密です。「おほしさまの声をようくきいとくんだよ」と、毎晩水をやりました。表題作ほか1編。



『こぶたのピクルス』

文/小風さち 絵/夏目ささ
1,600円 (福音館書店)

※第2作『ピクルスとぶたごのいもうと』もあり

こぶたのピクルスは、忘れものがないか何度も確認して、学校へ向かいました。途中で会ったウシの牛乳屋さんや口バのパン屋さんたちからお届けものを預かり、何度も確認しながら行きますが、いちばん大切なことを忘れてしまったようです。4編収録。



『大きくても ちっちゃい かばのこカバオ』

作/森山 京 絵/木村かほる
1,300円 (風濤社)

※第2作『まだまだちっちゃい かばのこカバオ』、第3作『ひっこしをした かばのこカバオ』もあり
体は大きくても、まだまだ子どものカバオくん。ある日、おもちゃの船を見つけて大喜びしますが、底には知らない名前が書いてありました。願いがかなったと思ったのに、少しずつ不安になってきます。ちいさなおはなしが9編。



国際アンデルセン賞作家賞受賞

角野 栄子さん



この人にあれもこれも

こんにちは！
絵本作家さん

今年3月、児童文学のノーベル賞といわれる国際アンデルセン賞の作家賞受賞に日本中が沸き返りました。新聞、テレビ、雑誌など多くのメディアからの取材に追われる中、80歳を超えてなお旺盛な創作活動が続ける角野さんの、今とこれからについて伺いました。

撮影／石川正勝 イラスト／角野栄子

もう
読んだ？

新刊
100!!

2018年3～5月に発売された新刊絵本の中から、読みきかせにもおすすめの100冊を選びました。子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

※出版社五十音順

📖 マークは乳幼児から、🎵 は中・高校生も楽しめる本です。

定期購読者限定プレゼント🎁

新刊絵本プレゼントの詳細は、このページの下欄をご覧ください。

『みんな みんな
いない いない ばあ』

文/いまむらあしこ
絵/さいとうたかお
850円(あすなろ書房)



カエルさんにネズミさん、フクロウさんにゾウさんも、いないいないばあをしています。かけ声は、ころころ、ちゅうちゅう、ほうほう、ばあ。最後は、みんな一緒に、いないいないばあ！ かわいいお顔と、こんにちばです。

『もしぼくが本だったら』

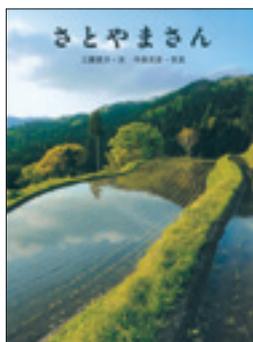
文/ジョゼ・ジョルジエ・レトリア
絵/アンドレ・レトリア
訳/宇野和美
1,800円(アノニマ・スタジオ)



もし、〇〇だったら……と、考えてみたことはありませんか？ 「本だったら」と考えた、いろいろな思いや状況が紹介されています。ベンチの上に忘れられた本を見つけた人は、連れて帰ることにしました。

『さとやまさん』

文/工藤直子
写真/今森光彦
1,500円(アリス館)



里山の四季を、美しい写真と詩情あふれる言葉でつづります。いつもそばにいてくれる里山には、いろいろな形でいろいろな命が「遊ぼう！」と待っています。さあ「さとやまさん」に会いに行きましょう。

『漢字はうたう』

詩/杉本深由起
絵/吉田尚令
1,300円(あかね書房)



もともと、それ自体が意味を持っている漢字。分解したり、イメージをふくらませてみると、新たに見えてくるものがあるようです。18文字の漢字と遊んでできた詩に、あたたかい絵がつけました。

『ねるじかん』

作/鈴木のりたけ
1,500円(アリス館)



夜遅くまでひとりで起きて遊んでいたら、ドアがゆがんで見えました。窓の外には魚の形の飛行船。ポストも歩きだし、恐竜の迷子も見つかりました。お母さんは知らないけれど、夜の世界は楽しいのです。

『ちょうちょうなんなん』

作/井上奈奈
1,300円(あかね書房)



チョウのはばたきが、クマの深い眠りを覚ました。クマの水浴びに驚いたカエルが川に飛び込み、それを見た魚は……。チョウのはばたきをなぞっていくと、地球のまわる音が聞こえてくるようです。

『まんまるだあれ』

文・切り絵/いまもりみつこ
1,300円(アリス館)



赤い丸に、ななつの模様と足が出てきたら、テントウムシになりました。水色、茶色、緑に紫、ピンクの丸からは、何が出てくるでしょう？ 切り絵の妙技を楽しみましょう。最後の黄色い丸の答えは、裏表紙にあります。

『ガラスのなかのくじら』

作/トロイ・ハウエル、
リチャード・ジョーンズ
訳/椎名かおる
1,500円(あすなろ書房)



クジラのウェンズデーは、水槽の中しか知りません。あるとき、遠くにすてきなブルーを見つけ、思い出せば、ジャンプを繰り返します。ある朝、女の子が来て、「あなたの本当の家は海よ」と言いました。

※ JPIC 直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。巻末のアンケートハガキまたはホームページのアンケートフォームで応募してください。

おはなし会 秋のプログラム

プログラム(各10~15分) 小学校低学年

9月 テーマ: 感じるままに表現しよう!

①「詩ってなあに?」

作/ミーシャ・アーチャー 訳/石津ちひろ
1,500円(BL出版)

「詩を作ったことある?」「詩って何かな?」と問いかけて、絵本に入ります。子どもたちも自分にとっての詩を見つけてくれたらうれしいです。



②「絵かきさんになりたいな」

作/トミー・デ・パオラ 訳/福本友美子
品切れ(光村教育図書)

「絵を描くことでも感じたことを表現できますね」とつなげます。作者の自伝的な絵本だと伝えて、最後にこの作者のほかの作品名を伝えてもいいですね。



10月 テーマ: かくれているのは?

①「くるみのなかには」

作/たかおゆうこ
1,400円(講談社)

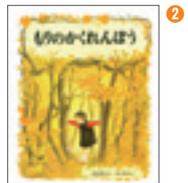
導入に、殻のかたいクルミを見せてあげましょう。「耳をすませてみて」と語りかけてから読み始め、豊かな想像の世界へ誘います。



②「もりのかくれんぼう」

作/末吉暁子 絵/林 明子
1,000円(偕成社)

次は、美しい秋の森でのかくれんぼ。何が隠れているか、けいこと一緒に探してみましよう。



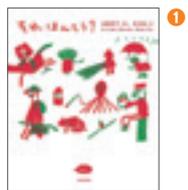
11月 テーマ: 「いただきます」のきもち

①「く」

「それほんとう?」より

文/松岡享子 絵/長 新太
1,300円(福音館書店)

導入にナンセンスな言葉遊びのおはなしを。終わりの「それほんとう?」を言ってもらおうと楽しいです。



②「いのちのたべもの」

文/中川ひろたか 絵/加藤休ミ
1,400円(おむすび舎)

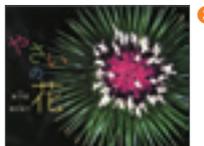
お鍋の食材を通して食べ物のいのちについて気づかされます。なかには、だじやれのセリフも! 楽しい雰囲気を読みたいですね。



③「やさいの花」

写真/埴 沙萌 文/嶋田泰子
1,500円(ポプラ社)

「野菜の花は美しく、いのちをつないでいる」という新鮮な驚きと発見のある写真絵本。図鑑仕立てなので、②で出てくる野菜や、興味を持ちそうな野菜を選んで紹介します。



(野阪麻代)



対象別おはなし会のプログラムです。ここで紹介する絵本や紙芝居は、ご家庭での読みきかせにもおすすめです。秋のブックガイドとしても活用してください。

行事絵本・季節の絵本

おじいちゃん

「だいすき、バードウォッチング」

作/サイモン・ジェームズ 訳/小川仁央
1,400円(評論社)

「鳥っておもしろい!」と、おじいちゃんはいろいろな話をしてくれます。だから、一緒にバードウォッチングに出かけたいけれど、鳥なんてちっとも見えません!



ハロウィーン

「パンプキン」

写真・文/ケン・ロビンズ
訳/千葉茂樹
1,400円(BL出版)

ハロウィーンに欠かせないパンプキン(かぼちゃ)の物語が始まるのは春。種まきから「おぼけランタン」になるまでを追った写真絵本です。



ふゆじたく

「きょうは ソンミの うちで キムチをつける ひ!」

文/チェ・インソン 絵/バン・ジョンファ
訳/ビョン・キジャ 1,500円(らんか社)

秋の終わり、朝鮮半島では、ひと冬食べる分のキムチをまとめて漬ける「キムジャン」という行事があります。それは、家族だけでなく、親戚や近所も総出の作業です。



紙芝居

「だいじ だいじ」

脚本・絵/ひろかわさえこ
1,500円(童心社)

くませんせいが、みんなに見せたのは「ほうさいずきん」。いざというとき、頭を守るためにかぶります。頭は、とても大事だからです。



紙芝居

「ほしがき べろべろ」

脚本・絵/土田義晴
1,400円(童心社)

柿の木にたくさんの実がなっているのを見つけたけれど、それは、そのままでは食べられない渋柿。どうすればいいのか、おじいちゃんが教えてくれました。



(安富ゆかり)

うっかりヨミ子さん、特養ホームに行く

ヨミ子さんは地域の読書ボランティアとして、小学校や図書館で開かれる「おはなし会」で活躍しています。2年前に読書ボランティアの先輩、美帆さんに連れられて、はじめて高齢者施設でのおはなし会に参加しました。そのときは、高齢者向けのおはなし会を始める気満々でしたが、一緒にやる仲間が見つからず、いつしか熱も冷めていました。



そんなある日、ヨミ子さんは街でばったり美帆さんに出会いました。美帆「お久しぶり。高齢者向けのおはなし会はやっているの？」ヨミ子「やりたいのは山々なんです。仲間が見つからなくて」

美帆「あら、それなら来週、特養ホーム（特別養護老人ホーム）でおはなし会があるけど、いらっしやる？」ヨミ子「えっ？ いいんですか？」

美帆「特養ホームは前に行ったデイサービスと違って、施設に入居している高齢の方が対象だから、認知症が進んでいることも多いけれど、それもいい経験になると思うわ」ヨミ子さんの好奇心に、久しぶりに火がつかまりました。

おはなし会は、午後2時から始まります。ホームは街中とは思えない豊かな緑に囲まれた2階建てで、48人の高齢者が入居しています。玄関を入ると、ホールで美帆さんと相棒の方が絵本などをテーブルに並べて打ち合わせをしていました。

美帆「この方は優子さん。もう3年くらい、こちらのおはなし会で私とコンビを組んでいるの」

優子「あら、若い後継者候補ね。うれしいわ」

美帆さんと優子さんがこのホームでおはなし会をするのは、月に一度。今回は6月なので、それぞれに6月らしい絵本や小道具を持ち寄っています。美帆さんのバッグから、新聞紙に包んだジョッキやグラスが出てきました。はたして何に使うのでしょうか。

おはなし会が始まりました

おはなし会の会場は、2階の居間のようなスペースです。開始10分前には、すでに9人の入居者が座っていました。ソファに腰掛けている方と、車椅子の方が半々くらい。女性が7人、男性が2人です。

参加者は、ほぼ横一列に座っています。2〜3m離れて置かれた木のテーブルの両脇に、美帆さんと優子さんがこやかに立ちました。ヨミ子さんは、参加者の後ろに座って、オープニングを見逃すまいと身を乗り出しています。

美帆「こんにちは。梅雨に入りましたけれど、毎日鬱陶しいですね。短い時間ですが、本を読んだり、紙芝居をいたします。私は美帆と申します」

優子「私は優子と申します。どうぞよろしくお願いします」

優子さんは、小さく折られたまいた紙を胸の前に掲げて、「くるくる変わり絵」を広げ始めました。紙を広げると葉っぱになり、葉っぱをたたむと卵が青虫になり、また開くとサナギになり、サナギはチョウになり、チョウはまた卵を産むという繰り返しのおはなしです。参加者はいつの間にか12人に増えていました。みな静かにおはなしを聞いています。「くるくる変わり絵」は、チョウからニワトリの卵に変わりました。

次に優子さんは、「みなさん、卵料理は何がお好きですか？」と語りかけ、「いろいろたまご」。みなさんの好きなものが出てくるといいですね」と言って絵本を読み始めました。ゆで卵、目玉焼き、オムレツ、スープとページをめくっていくと、みなうなずきながら見つめています。優子